

篠原房枝作 テーマ「生きがいについて」③ 「人は生かされている？」

生徒 起立。礼!

効果音 (教室のガヤ)

忍 典子、帰ろう。

高橋典子 あ、忍。うん、行こう。

音楽 (ブリッジ)

忍 あー、やっと2年が終わったね。だけど早いなあ。ついこの間、高校に入ったと思ったら、来月からはもう3年！ 頑張らなくちゃ。お互い進学だもの。

典子 (沈んで)うん。そうだね。

忍 どうしたの？ 気のない返事なんかして。典子、この上の大学へ行くんでしょ？ いくら付属だからって、今日からの春休み、大いに活用して、少しでも先 進んでないと、きついわよ。

典子 そうなのよね。頭では分かっているつもりなんだけど、なんかやる気にならないの。もちろん、この大学に進みたいから、高校はわざわざこの学校選んだわけだけど、今、こうして高2も終わって、あと1年！ と感じる半面、とてもむなしいの。

忍 むなしい？ なぜ？ これから先の将来を決める大切なとき、そんな思いでいられる？

典子 ううん。でも…、わたし、なんのために大学行くのか、どうして将来の目的があるのかと考えているうちに、行き詰まり感じて、結局は何をするにも自分中心でしかないように思えてきたの。そしたら、わたしの人生なんてどうでもよくなってきちゃった。なるがままに、なんて気分。

忍 そんな。自分を放棄するようなこと言わないでよ。目的って、人によって様々なものだけど、行きつくところは一つであるべきだと思うの。

典子 行きつくところは一つ？

忍 そうなの。だからわたしは、勉強がこれと言ってできるわけじゃないけれど、これだけは、授かったものとして、音楽のほうへ進もうと思って、大学希望したわけ。

典子 授かったもの？ 忍の言ってること、なんだかよく分からないな。でも、そうしたはっきりとした生きがいを持つてるのは、どういうわけ？

忍 わたしたち人間は、一人一人違った個性を持っているように、一人一人が進むそれぞれの道も持つてるはずでしょ？ それは与えられたものだと思うの。

典子 “与えられた”って、だれに？

忍 神様に。

典子 神様?!

忍 そう、神様。さっき典子が言った、はっきりした生きがいを持つてる訳は、わたしが神様を信じてるからなの。実を言えば、わたしもかつて、典子みたいな時があったの。自分の将来についてすごく悩んだ時が…。

高橋 君が？

忍 小さいころから習わされたお琴、いつの間にか、母親も師匠も、わたしの将来は琴の道と決めていたの。何も分からないころは、ただ漠然と聞いていた夢物語も、中学に入り、高校に

入って、いよいよ自分の道を選ぶことが目の前に来た時、すごく重荷となってきて、行き詰まりを感じた。人に敷かれたレールの上は走りたくない。人が選んだところへは進みたくない。そんな思いを持っていた時、教会のある人の言葉が目にとまった。「神様を伝えるために、自分は生きよう。」

典子 その人、何してんの？ 伝道師とかっていの？

忍 ううん。中学校の音楽の先生なの。とっても声がきれいで、教会でもよく賛美歌歌ってくれるの。その人が、「自分が歌うのは、神様を伝えるためなんだ」って。本当に考えちゃった、わたし。

高橋 ふーん。そんな生き方もあんのかなあ。

忍 自分の才能なんて、限りがあるもの。けれどその才能も、生かすか殺すかは自分次第。わたしは、その与えられたものを、少しでも良くしていかなくては、と思ったの。自分自身のためではなくて、神様のために。人間は生かされているものだから、決して自分で自分を放棄したりはできない。そのことが本当に分かった時、自分がどう生きていけばいいか、自分なりに確信が持てるようになったの。

ねえ、典子、一度教会へ来てみない？ 必ずあなたの道が与えられるから。

<続>